宿に戻って一風呂浴びたら、急に気が抜けてしまった。
なんかたいしたこともしないうちに、一仕事終わってしまった。しまったような気がする。終わったんだよな。これ。
もやもやだらけだが。
それにしてはいい稼ぎ。それもまた……どこか理不尽だ。
あの左十とやらは依頼の者の所に戻ったのだろう。どう始末を付けたのか知らんが。
依頼の者もいずれ何処かから伊作の死のことを知るだろう。どこの誰が斬ったと知れずとも。
因果応報で落着、となるはずだ。業腹収まらず、かもしれないが。
半金返した伊助はぺこぺこと頭を下げ、何処かに急ぎ足で旅立っていった。こんな地で長居しようという気にもならぬだろうしな。
結局博徒の仇も討たなかった。それもまた……どうやら煮え切らぬ、ところはある。あることはある。
ま、博徒の言う盆莫蓙（ぼんござ）の垢だから。いいか。
壺で擦って擦って出た垢だとか。

雷斗が宿で布団の上でぼへーっとする。
母娘は長風呂中だ。俺に可愛がられる為、からだを磨き抜いているのだろう。
いつもちょっとびっくりするほど長い。
此度のあれこれはきっちり金子が出る依頼であるにもかかわらず、人も斬らず、ただ世間話で終わるという。
その前が血風吹き荒ぶ凄まじいものだっただけに、拍子抜けの心地がある。
が、あの者の軽みのおかげで、妙に心晴れるかの如き爽やかな気分……もある。
ああも商いとして仇討ち屋を割り切れるとは。
美人茶屋ねぇ。

もう少し酒を交えて話がしてみたい気がした、というのが本音だ。
同業者にそんな感情を持つのもまさに稀。
あの斬馬刀の長所とか苦労とか。そんな話もしてみたい。
また逢ってみたいと思う御仁であるな。
仇討ち相手同士、とかではなく。

微かに……とたとたと四つの小さな足裏の音が聞こえ……
すらり、と障子が開き……浴衣姿、ほこほこの母娘二人が姿を現した。
その紅顔、暖かく火照っている。
その瞬間に、仇討ちのごたごたの総てが頭の中から霧散した。

「まずは……お疲れ様でございました……」
湯上がりの二人おんなが並び、雷斗の正面にすらり、と床に正座すると深々と三つ指に頭を下げた。洗い髪が薫り、心が暖暖となる。平穏の床の薫りだ。

「斯様な剣戟を目にするのは二度目……それでも、心穏やかならぬ傍見の身として……無事の御帰来……心より安堵致しております……」
「此度は相手方がちと、変わり者だったようだから……なんぞ世間話で終、となる……あまりない異例の事態ではあったな。ま、無事で重畳。おかげで……今宵も……御身らを存分に可愛がることが出来る、と。嬉しい一夜であるぞ。むふふふ」
「ああ……雷斗様……雷斗様の無事のご帰還……この身で……母娘二人のからだ総てで……散々に祝したいと存じます……我が身、娘の身で、存分に……うふふっ」
「うん。嬉しいぞ。しず。みり」
すりすりと二人母娘が正座から膝を崩し、むちりとした尻をずらしずらし擦り寄ってくる。その笑みの中の瞳が……愛欲に濡れ光っている。うふふ、と小さく微笑むその笑みに、艶気が溢れて凄まじいばかり。
「ささ。好きな方が好きなようにしろ。というか、疾く。疾く。俺を構っておく

れ。ふふふっ」
軽く纏っていた夜着の前をふぁさりと開く。
そのあぐらの腰に下帯はなく、熱い固いものはもうすでにかんかんに突き立っていた。
それを目にし……おんな達の瞳の奥が蕩けた。

好きな方が、とは言ったが、小さい母娘の言い争いの後。
指と指の小さな諍いがあったが。どっちが一指多く指を絡めるか、という。
でも、仲良し母娘は仲良く。
二人ごとに、熱くそそり立つ男のものの根に手を添え、指を絡め……母娘二枚の舌を這い回らせてきた。
あが……と野太く声を漏らし……天井に噴き上げ、腰を仰け反らせた。

××

放悦二枚舌四乳埋戯（ほうえつのにまいじたよつちちのあそび）

小さな二つ口があちこちを啄む。小さな二枚舌があちこちを這い回る。
あが……油断してたら……出る。あっけなく放ってしまいそう。
腰奥に溶岩のようなものが溜まっている。生死の際をくぐり抜けたときは決まってそうだ。昂ぶりが尋常ではない。

その上美姫が年増一人、若姫一人。存分に口の愛撫に専念している。
牝の情欲、おんなの愛着にのめり込みきっている。
その熱気。溢れ出る艶気。はあ……と吹きかけられる吐息の熱さ。
首を振り振り、固く熱い男のそそり立ちに二人がかりで舌で舐めずり回す二つの小さな頭の異様なまでの痴態。
その粘膜の美悦。ばらばらの動きの二つ口、二枚舌が隅から隅まで。
何もかもが堪らん。
時に先端だけを母口がかぷりと咥え……んぅぅ……と娘口が不満の意を鼻声で訴えれば。ぬらりと雁を逆撫でて唇を抜き……ううっ……と男口が野太く呻き……はいどうぞ、とばかりにしずがみりの方に一物を傾けて先端を向ける。
んん……と喉声に嬉しさを表したみりが、早速ぱくりと。あむあむと唇で食むように口いっぱいに咥え……その中で舌をくりくりと這い回らせてくる。
んお……と雷斗の口からも嗚咽が出る。
その光景を愛おしげに見詰めるしずの指先が、そそり立つものの根を優しくこしこしと細い指先で扱き立てる。
母が与え、娘が口にする。母娘の情愛の光景。堪らなく淫らな。
むぐむぐと口の中一杯に味わったみりが……ぬらりとその赤黒い瘤を口から吐き出した。
はい……かかさまも……と、くりっ、とそそり立つものを傾け、その先端をしずの方に向ける。
んふっ……じゃ、ご相伴……と小さく呟き……しずの口があむり、と雷斗の一物を咥え込む。
んおぅぅ……と、小さく雷斗が吼え……腰をふるりと震わせた。
間を置かず母娘の口戯の連続。母娘の互いの唾に塗れまくって。
母の唾と娘の唾が這い回る舌の動きにねっとりと掻き混ぜられている。塗されまくっていく。んぉぉぉ……
若舌の動きはくりくりと、さわさわと、素早く……ここはどうですか、ここはどう……？……と、溌剌とあちこちを責めてくる。
可愛らしく上目遣いに見上げてくる。
年増舌はあくまでねっとりと、じっくりと……ここですよね……存じております

……と、急所、勘所を的確に移動していく。
しっとりと伏せた目に愛欲を滲ませている。
どちらも……美触美悦極まりない。それが同時という贅沢。
ああ……男の感得しうる最大が……最大の喜悦が……これでは……？
今ここに情に負け、放っても。
二人母娘は歓喜に顔を輝かせるだろう。
その似通った二つの美顔を……俺の汁でどろどろにする……ああっ。
俺の放つ白濁汁で……ねとねとにするっ。熱い精汁でその情欲に火照りきった顔を染めてやるっ。赤らんだ頬に白濁の汁をっ。蕩けきった顔をさらに溶かすようにっ。ああああ。
そんな想像が頭を灼き切った！
んお！
雷斗の手が自らのものを握った！　すらりと膝立ちに立ち上がった！
「しずっ！みりっ！その可愛い顔を並べろっ！掛けてやる。俺のっ。俺の精汁っ。塗れさせてっ！俺のものと証してやるぞっ！ああ！」
激しく扱き立てる一物の真ん前に。
ああ……はいっ……と声を揃えて、しずとみりの顔がくっついて並んだ。
足は正座のまま両手を揃えて床に付き、その細肩をみちりと寄り添わせて。
頬が熱く重ね合わされ、その目がきらきらと輝いている。
舌をちらりと出して、待ち望んでいる！あああ！
なんて愛らしく美麗な牝犬二匹！　母犬娘犬と！　うっとりと見上げてくる！
この二つ顔にっっ！あああ！